

研究フォーラム「食と農」世話人会は7月18日（火）、生活協同組合コープあいち（以下、コープあいち）「産直ひろば・いのこしの樹（以下、いのこしの樹）」を訪問。暮らす一育てる、つくる、売る・買う・笑う（商）、食べる—生産者と消費者が協同して「購買をつくる場」を学びました。

コープあいち「いのこしの樹」は2001年、猪子石店（当時・めいきん生協）の閉店後も、同店の利用者やパート職員、そして農民連等のつながりで購買可能な広場を運営しようと始まった。2001年6月スタート。16年続く消費者と生産者が一緒に作る直売場。生産者が中心の直売場は各地域にあるが、消費者が運営に関わる「場」はあまり目にしない。

生産物は生産者がいのこしの樹に収め、13名の運営スタッフ（消費者）で購買促進、会計、陳列などを分担。毎週火曜と金曜日、10：00～12：30に開催している。

当日は開店前に来場者が集り、5分前に開店。野菜や果物、鮮魚、豆腐などの冷蔵品の並んだ店内は来場者で満員。会計では7～8人くらいの列ができるも、買い物客同士、スタッフと会話が弾む時間となった。

運営スタッフの竹内さん（写真左下）によると2016年の売り上げは2,980万円（内農産物が2,000万円ほど）。1日あたり来店者200人～230人、一日あたり25万ほどの売り上げになるとのこと。店舗の賃料、スタッフの人件費などを差し引いても何とか「黒字」になっているとのこと。多くの直売所と同様に販売手数料を売価から受取り、売れ残りは基本的に持ち帰りになっていた。

今後の課題は生産者、運営スタッフ（半分は70歳以上）の高齢化。生産者と消費者が協同して作る「商の場」が継続できるといい。

（名古屋市名東区）

▼開店前 産地から持ち込まれた「とれとれ感」がいっぱい



▼開店 開店待ちの来場者も多く、5分前に開店



▼運営スタッフ「竹内さん（写真左から一人目）」と懇談



▼竹内さんと参加世話人

